

# 坂元遺跡における古代の掘立柱建物群の検討

中川 渉

## 1 はじめに

加古川市野口町坂元に所在する坂元遺跡は印南野台地の西端に位置し、西側の段丘崖下には加古川デルタの東縁に沿って別府川が流れている。同地では、J R山陽本線の高架化と東播磨南北道路の建設、および坂元・野口地区の土地区画整理という3つの事業が一体的に計画され、それを契機として遺跡が発見された。本発掘調査は平成11～20年度にかけて事業ごとに順次実施し、旧石器時代・縄文時代・弥生時代・古墳時代・古代・中世・近世の各時期の遺構・遺物が見つかり、長期間にわたって断続的に利用された遺跡であることが判明した。中でも古墳時代後期の埴輪窯は、県下で初の調査例となった。調査の内容は4冊の報告書（『坂元遺跡Ⅰ～Ⅳ』）<sup>(1)</sup>にまとめられている。

この発掘調査で最も注目されたのは飛鳥時代～奈良時代にかけての掘立柱建物群で、遺跡全体で約100棟の建物跡が報告されている。当該期には、山陽道の賀古駅家である古大内遺跡が南東1km強の地点に存在しており、両者を結びつけることによって、この遺跡は駅家運営の基盤となる「駅家郷」であり、その経営に従事した「駅子」の集落であったという評価がなされている。

このように重要な遺構でありながら、建物群の詳細なデータが報告書に整理された形で提示されていない部分が多いために、さらなる研究を進める上での支障となっている。そこで今回、報告書および空中写真測量図から必要なデータを読み取り、提示することで懸案に応えたいというのが本稿の主眼である。

## 2 掘立柱建物群のデータ整理

対象とするのは、当該時期の中心と目される地区を含む『坂元遺跡Ⅰ・Ⅱ』の2冊の報告書（以下、『Ⅰ』『Ⅱ』と表記する）で、『Ⅰ』において実践した整理手法に倣って『Ⅱ』の掘立柱建物群のデータを抽出・提示する。なお『Ⅰ』のデータも、方位や時期を見直した部分については修正を加えた。

『Ⅱ』には非常に広い範囲の調査区が所収されているが、報告書で指摘された約80m四方の「中心区画」とその周辺にあたる17区・25～28区・30～31区・37～38区・40区で報告されている68棟に、新たに26区で復原できた1棟（仮番号S B 2624）を加えて検討を行った。その結果、53棟の建物跡からデータを抽出することができ、『Ⅰ』の20棟と合計して73棟の建物（第2図）の属性を一覧表（表1）に提示した。

表には、梁間と桁行方向の柱の間数・規模・柱間の距離、棟方向の方位といった実測的な数値と、建物の軸線の方位による分類を記入し、出土品の時期や切り合い関係などもわかる範囲で表している。

## 3 掘立柱建物群の分類と検討

### 建物の軸線による分類

『Ⅰ』では、棟の方位をもとに、建物群を「N0群・E1～E3群」の4種類に分類していた。しかし今回の検討を通じて、建物の軸線が山陽道に規制されて変化するという見通しに基づき、E1～E3群の分類基準とした方位を山陽道に合わせて90°ずらし、分類名も「W1～W3群」と変更する。また

表 1 掘立柱建物跡一覧表

報告書	地区	遺構名	間数		規模			柱間		棟方向		切り合い (古<新)	出土遺物 掲載番号	時期
			梁間	桁行	梁間(m)	桁行(m)	床面積(㎡)	梁間(m)	桁行(m)	方位	分類			
坂元 I		SB02	2	2+a	4.7	[4.7]		2.3~2.4	1.9~2.8	E 2° N		02 < 01		
坂元 I		SB03	2	1+a	4.0	[2.0]		1.9~2.1	2.0	N 5° W				I
坂元 I		SB04	1+a	1+a	[2.5]	[2.0]		2.5	2.0	N 0°				I
坂元 I		SB05	1+a	2+a	[2.8]	[5.2]		2.8	2.5~2.7	N 2° W		06 < 05	4・5	I
坂元 I		SB06	1+a	2+a	[2.9]	[4.2]		2.9	1.8~2.4	N 0°		06 < 05		I
坂元 I		SB07	2	2+a	5.5	[3.7]		2.7~2.8	1.8~1.9	E 8° N				
坂元 II	26区	SB2607	1	4	2.8	4.4	12.32	2.8	1.0~1.2	N 6° W				
坂元 II	26区	SB2622	2	4+a	3.2	[5.6]		1.6	1.3~1.5	N 0°				
坂元 II	28区	SB2803	2	3+a	4.2	[5.8]		2.1	1.6~2.2	E 4° N			459・460	I
坂元 II	28区	SB2808	1+a	2+a	[2.2]	[3.7]		2.2	1.8~1.9	E 4° N				
坂元 II	30区	SB3001	2	3	4.2	6.3	26.46	2.0~2.1	2.0~2.1	E 0°				
坂元 II	31区	SB3101	2	3	3.2	5.2	16.64	1.6	1.5~2.0	N 0°		3102 < 3101		
坂元 II	31区	SB3104	1+a	1+a	[2.1]	[1.7]		2.1	1.7	E 2° N				
坂元 II	31区	SB3106	2	3	3.4	4.8	16.32	1.7	1.5~1.7	E 8° N				
坂元 II	31区	SB3107	2	3+a	4.0	[6.4]		2.0	1.8~2.5	N12° W				
坂元 II	37区	SB3710	2	3	3.1	3.9	12.09	1.4~1.7	1.3	E 7° N				
坂元 I		SB11	1+a	3	[1.3]	3.5		1.3~1.5	1.1~1.3	N59° W		11 < 14		
坂元 I		SB16	1+a	3	-	4.5	-	-	1.4~1.6	N55° W				II
坂元 I		SB17	2	3	3.6	3.6	12.96	1.6~2.0	1.1~1.4	N33° E		17 < 15	12	II
坂元 I		SB18	2	1+a	4.1	-	-	2.0~2.1	-	N57° W				
坂元 I		SB19	2	1+a	4.2	-	-	2.1	-	N55° W			13	I
坂元 I		SB20	2	1+a	3.6	-	-	1.7~1.9	1.3~1.4	N55° W				
坂元 II	26区	SB2602	3	2+a	4.0	[2.4]		1.3~1.4	1.2	N58° W		2602 < 2603		
坂元 II	28区	SB2807	1+a	3	[1.7]	6.3		1.7	1.8~2.3	N58° W				
坂元 II	30区	SB3002	2	2	2.7	3.3	8.91	1.3~1.4	1.6~1.7	N34° E				
坂元 II	31区	SB3109	2+a	3	[2.9]	4.9		1.4~1.5	1.5~1.8	N61° W				
坂元 II	37区	SB3702	2	3	3.3	4.4	14.52	1.5~1.7	1.3~1.6	N57° W				
坂元 II	37区	SB3709	2	3	4.7	5.5	25.85	2.3~2.4	1.8~2.0	N33° E			851~853	II
坂元 I		SB01	2	3	3.8	5.5	20.90	1.8~2.0	1.7~1.9	N44° E		02 < 01	1~3	II
坂元 I		SB09	2	3	3.6	5.4	19.44	1.8	1.7~1.9	N45° W		09 < 10		
坂元 I		SB14	2	3	3.5	6.0	21.00	1.6~1.8	1.7~2.3	N40° E		11 < 14		
坂元 II	26区	SB2601	2	3	4.0	4.4	17.60	2.0	1.2~1.5	N47° W				
坂元 II	26区	SB2603	3	3	3.6	3.6	12.96	1.0~1.4	1.0~1.4	N45° E		2602 < 2603		
坂元 II	26区	SB2610	3?	3	4.6	6.4	29.44	-	2.0~2.3	N42° E				
坂元 II	26区	SB2614	2	3	3.4	5.6	19.04	1.6~1.8	1.8~2.0	N40° E				
坂元 II	26区	SB2623	2	2	3.6	3.0	10.80	1.8	1.3~1.7	N43° E				
坂元 II	26区	SB2624	2	3	3.0	4.7	14.10	1.4~1.6	1.5~1.6	N46° E			401	
坂元 II	28区	SB2805	2	1+a	3.2	[1.7]		1.5~1.7	1.2~1.4	N38° E				
坂元 II	31区	SB3102	2	3	3.6	4.2	15.12	1.7~1.9	1.3~1.5	N45° E		3102 < 3101		
坂元 II	37区	SB3704	3	3+a	4.8	[6.4]		1.5~1.8	2.0~2.3	N45° W		3704 < 3703		
坂元 II	37区	SB3706	1+a	3	[2.2]	6.2		1.8~2.2	2.0~2.1	N38° E		3707 < 3706		
坂元 II	37区	SB3707	2	3	3.7	4.9	18.13	1.7~2.0	1.5~1.6	N37° E		3708 < 3707	850	I
坂元 II	37区	SB3708	2	2	3.7	4.5	16.65	1.7~2.0	2.0~2.5	N43° E		3708 < 3707		
坂元 II	37区	SB3711	2	3	3.4	4.4	14.96	1.6~1.8	1.3~1.8	N38° E			854	
坂元 II	37区	SB3712	2	3	3.8	5.8	22.04	1.8~2.0	1.8~2.0	N43° W			855	
坂元 I		SB08	2	3	3.2	5.1	16.32	1.5~1.7	1.6~1.7	N58° E				
坂元 I		SB10	1+a	3	[1.5]	4.8		1.5	1.3~1.9	N36° W		09 < 10		
坂元 I		SB12	2	2	3.6	3.3	11.88	1.4~2.2	1.5~1.8	N37° W			6・7	I
坂元 I		SB13	2	3	3.5	5.7	19.95	1.7~1.8	1.7~2.2	N40° W			8~11	I
坂元 I		SB15	2	2	3.1	3.6	11.16	1.5~1.6	1.7~1.8	N41° W		17 < 15		
坂元 II	25区	SB2501	1+a	2+a	[1.8]	[3.0]		1.8	1.5	N29° W				
坂元 II	26区	SB2609	2	3	4.6	6.9	31.74	2.0~2.4	2.3~2.4	N50° E			389	II
坂元 II	26区	SB2615	2	2+a	4.8	[3.4]			1.5~2.0	N50° E			390~393	II
坂元 II	26区	SB2617	2	4	4.0	7.6	30.40	2.0	1.8~2.0	N30° W			394~396	II
坂元 II	26区	SB2618	2	3	4.6	4.6	21.16	2.0~2.6	1.4~1.7	N39° W				
坂元 II	26区	SB2619	2	4	3.8	6.8	25.84	1.8~2.0	1.3~2.1	N36° W			397・T50	II
坂元 II	27区	SB2701	3	3	4.2	4.2	17.64	1.3~1.6	1.3~1.6	N36° W				
坂元 II	28区	SB2804	2	3	3.0	5.4	16.20	1.5~1.7	1.7~1.9	N42° W			461	I
坂元 II	28区	SB2806	1+a	3	[2.0]	5.0		2.0	1.6~1.8	N37° W			462・463・T12	II
坂元 II	28区	SB2810	1+a	3	[2.3]	3.8			1.0~1.4	N33° W				
坂元 II	37区	SB3701	2	2	2.4	3.2	7.68	1.2	1.6	N24° W				
坂元 II	37区	SB3703	2+a	1+a	[3.8]	[1.6]		1.6~2.2	1.6	N30° W		3704 < 3703		
坂元 II	37区	SB3705	2	2+a	4.0	[5.0]		1.8~2.2	2.4~2.6	N37° W				
坂元 II	38区	SB3804	1+a	2+a	[2.0]	[3.8]		2.0	1.8~2.0	N37° W				
坂元 II	40区	SB4001	3	3+a	5.0	[4.8]		1.6~1.7	1.6	N30° W		4002 < 4001		
坂元 II	40区	SB4002	3	3+a	4.8	[4.6]		1.6	1.3~1.6	N30° W		4002 < 4001		
坂元 II	17区	SB1702	1+a	1+a	2.0	2.4		2.0	2.4	N20° W		1702 < 1703		
坂元 II	26区	SB2604	2	3	3.4	5.4	18.36	1.7	1.7~1.9	N23° W				
坂元 II	28区	SB2801	1+a	3	[2.0]	4.2			1.4	N21° W			457	
坂元 II	37区	SB3713	2	2	3.0	3.2	9.60	1.4~1.6	1.4~1.8	N21° W				
坂元 II	38区	SB3801	2	2	3.2	2.8	8.96	1.6	1.4	N21° W			856	II
坂元 II	38区	SB3802	2	1+a	2.6	[1.1]		1.3	1.1	N23° W				
坂元 II	38区	SB3803	1+a	2+a	[1.5]	[3.6]		1.5	1.7~1.9	N24° W				

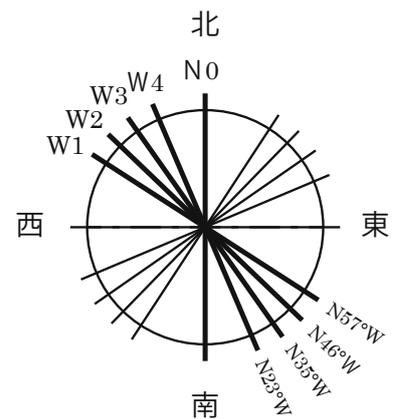
[ ] 内の数字は残存値

新たに「W4群」を加えて5分類とした（第1図に各分類の方位を図示する）。以下、その分類ごとの内容と特徴を記す。

①「N0群」（第3図）

建物の軸線が概ね東西南北の正方方位に向くものである。16棟の建物を含み、棟の方向はN0～12°W（東西棟はE0～8°N）の範囲に収まる。

南北正方方位の建物は対象範囲の中心付近から国道2号に近い『坂元遺跡Ⅲ』の調査区にまで散在的に広がっている。なお「中心区画」とされる範囲内では、大型の方形掘り方の柱穴をもつSB03・04、SB05・06が同一箇所重複して建て替えられている。



第1図 建物群の方位図

②「W1群」（第4図）

軸線が北から西へ57°前後振るものである。12棟の建物を含み、棟の方向はN55～61°W（南北棟はN33～34°E）の範囲に収まり、東西棟のものが多く。

建物は「中心区画」の主に西寄りに分布する。

③「W2群」（第5図）

軸線が北から西へ46°前後振るものである。17棟の建物を含み、棟の方向はN43～47°W（東西棟はN37～46°E）の範囲に収まる。

「中心区画」の東側を仕切る溝SD3703、SD3801、SD4001および西側の段丘崖の内側に沿う溝SD2603、SD14の方位もW2群と同じN44°Eを示しており、建物はその区画の全域に分布している。「中心区画」との相関性が最も強い建物群といえる。

④「W3群」（第6図）

軸線が北から西へ35°前後振るものである。21棟の建物を含み、棟の方向はN29～42°W（東西棟はN50～58°E）の範囲に収まり、東西棟のものが多く。

建物は「中心区画」の主に中央から東寄りに分布する。

⑤「W4群」（第7図）

軸線が北から西へ23°前後振るものである。7棟の建物を含み、棟の方向はN20～24°Wの範囲に収まり、東西棟のものが多く。

建物の分布は「中心区画」の東端に多いが、区画との相関性は不明である。

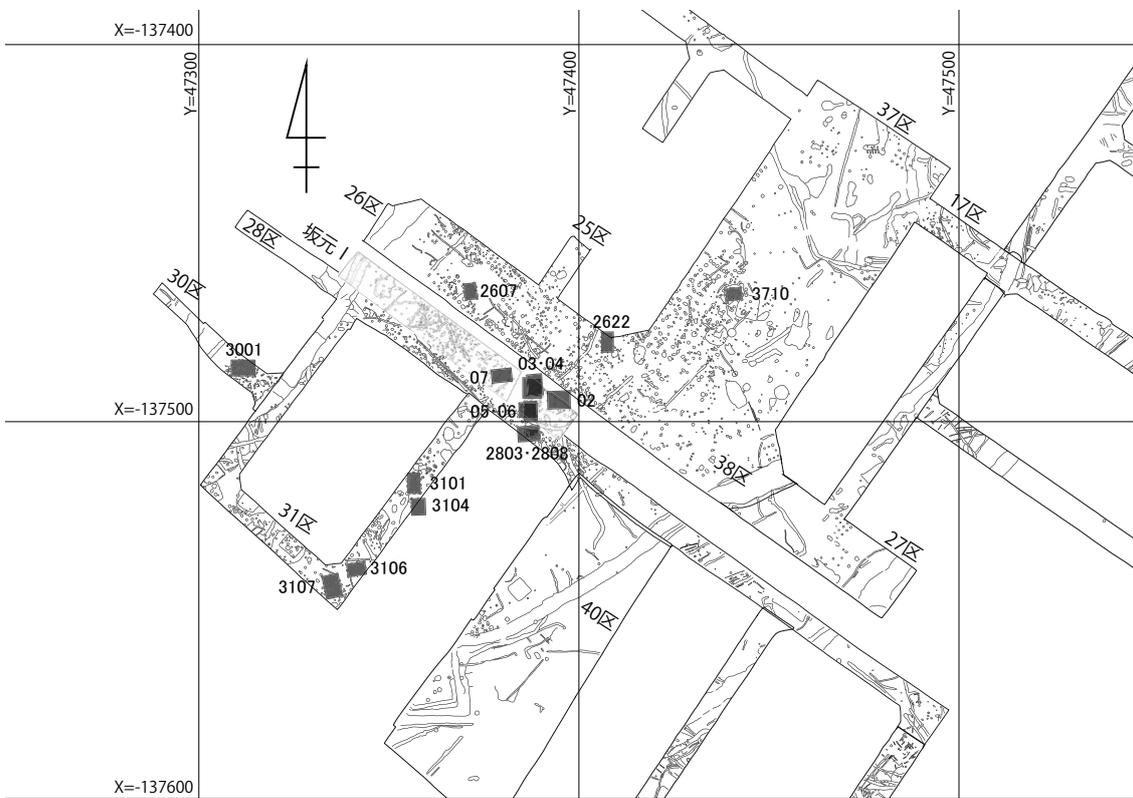
### 建物群の時期と変遷

建物の軸線をもとにした上記の分類については「共通の方向性を意識した建物群は時的にも一定のまとまりをもつ」と仮定する。その前提に加えて、表1に掲示している出土土器や切り合い関係をもとに、建物群ごとの時期や前後関係を検討する。

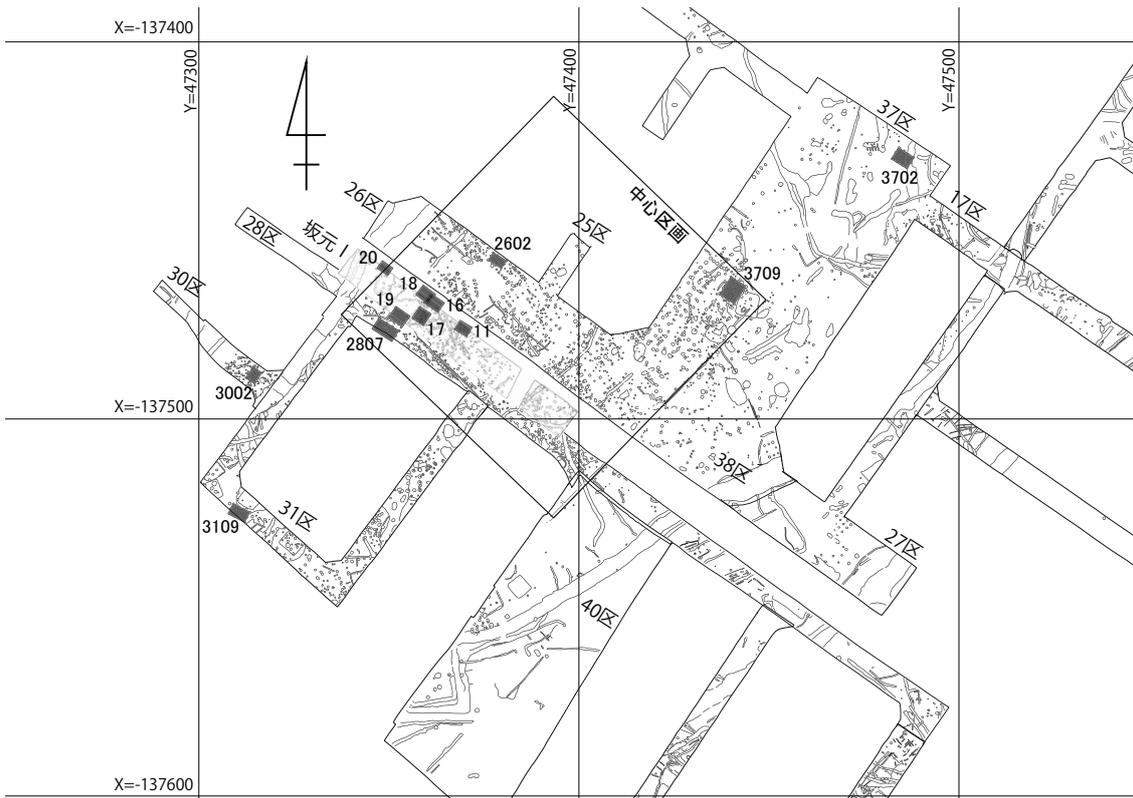
出土土器については『I』のまとめの中で、「坂元古代I期」：飛鳥Ⅱ～Ⅲ期と「坂元古代II期」：飛鳥Ⅳ～Ⅴ期の2段階の年代観（以下、「I期」「II期」と表記する）を提示した。やや時期幅が大きいですが、柱穴からの出土品は非常に限られており、それ以上の細分は困難と考えられる。そのため建物群の変遷も、大まかな傾向を示すにとどまることを断っておく。



第2図 掘立柱建物群全図



第3図 N0群の掘立柱建物



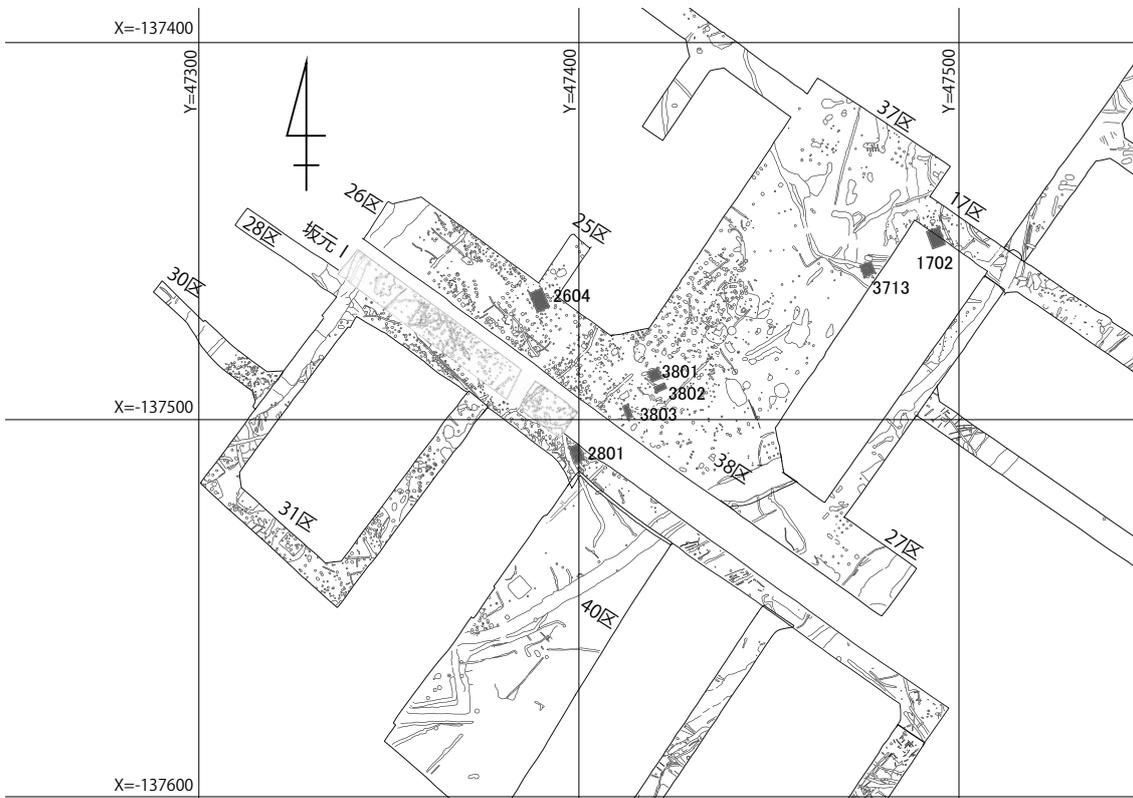
第4図 W1群の掘立柱建物



第5図 W2群の掘立柱建物



第 6 図 W 3 群の掘立柱建物



第 7 図 W 4 群の掘立柱建物

まず「N0群」ではSB04・05・2803から「I期」の土器が出土しており、他に「II期」に下る資料はない。切り合い関係では、SB02が「W2群」のSB01に切られている一方、SB3101は「W2群」のSB3102を切っている。

「W1群」ではSB16・17・3709から「II期」の土器が出土している。なおSB19からは「I期」の土器が出ているが、ちょうど当該期の資料が多量に出土したSX04の埋土に柱穴を掘り込んでいるので、混入品の可能性が考えられる。『I』では一連の建物としてSB18・20も「I期」としていたが、判断を修正する。切り合い関係では、SB11・2602がそれぞれ「W2群」のSB14・2603に、SB17が「W3群」のSB15に切られている。

「W2群」ではSB01から「II期」の土器が、SB3707から「I期」の土器が出土している。切り合い関係では、SB01が「N0群」のSB02を、SB14・2603がそれぞれ「W1群」のSB11・2602を切っており、SB3102が「N0群」のSB3101に、SB09・3704がそれぞれ「W3群」のSB10・3703に切られている。

「W3群」ではSB2609・2615・2617・2619から「II期」の土器が、SB2804から「I期」の土器が出土している。またSB2806から出土している丸瓦片も「II期」のものと考えられる。なお、SB12・13からは「I期」の土器が出ているが、SB19の場合と同様、下層遺構からの混入品の可能性が考えられる。切り合い関係では、SB15が「W1群」のSB17を、SB10・3703がそれぞれ「W2群」のSB09・3704を切っている。

「W4群」ではSB3801から「II期」の土器が出土している。データを抽出しえた建物の中では、切り合い関係はない。

以上をまとめると、出土土器については「N0群」が「I期」に限られ、「W1群」「W2群」「W3群」「W4群」は「II期」が優勢である。柱穴には古い時期の遺物が混入する可能性もあり、概ね「II期」の範疇で捉えておく。

切り合い関係では「N0群」→「W1群」→「W2群」→「W3群」の関係が示されている。唯一「N0群」のSB3101と「W2群」のSB3102の切り合いのみ矛盾しているが、「N0群」が建物群の中で最も古く位置づけられることは動かないとみてよい。なお「W4群」にはデータを抽出した建物との切り合いはなく、前後関係は不明である。

#### 4 まとめ

ここまでの検討を踏まえて坂元遺跡における古代の建物群を概観すると、正方位を基準とする「N0群」から、西へ57°～35°傾く「W1～W3群」に変遷しており、建物の軸線が次第に東へ振れていったことが伺える。「W4群」については情報不足のためこの後の検討から除外しておくが、方位変化の傾向からは「W3群」に続く可能性がある。

「W1～W3群」の建物群は、前述した約80m四方の「中心区画」に集中しており、時期的に連続かつ重複していたと考えられる。その初期段階である「W1群」についての『I』調査時の所見によると、SB11・16～20の柱穴は窪地を埋め立てて整地<sup>(2)</sup>した面から掘り込んでおり、集落としての開発が本格化した画期と理解できる。「W2群」になると「中心区画」の東辺は溝で区画され、その全域に建物群が分布するようになり、エリアとしての意識が明確化した段階といえる。「W3群」の建物は軸線をさらに東へ振り、何故少しずつずれるかは不明だが、それでも「中心区画」に収める意識は持続してい

る。一方、「N0群」においても南北に並ぶ3棟の建物SB03・04、SB05・06、SB2803・2808が「中心区画」の範囲内で同一箇所に建て替えられていて、このエリアを集落の要部とする意識の萌芽が「I期」段階に遡る可能性も指摘できる。

この「中心区画」は『II』において指摘されたもので、西辺の段丘崖、東辺の溝SD3703・SD3801・SD4001と、北辺と南辺については建物群の途切れるラインをもって範囲を想定している。一辺約80mという方形プランは、賀古駅家、(仮称) 邑美駅家、布勢駅家で確認された播磨国の駅館院の共通サイズであり<sup>(3)</sup>、坂元遺跡においてもそれが意識されていた可能性がある。ただし駅館院ではこの敷地を正方位に配置するのに対し、ここでは山陽道の方向に向いているのが大きな違いである。

こうした現象を解釈する糸口として、当時進行中であった山陽道の整備との関係を斟酌して推測してみたい。まず、集落の建設が始まった7世紀中頃には、山陽道が未整備か整備中であったために、「N0群」の建物は方位に基づいて建築された。整備がある程度進捗した7世紀末頃には、山陽道が集落建設の基線となり、「W1～W3群」の建物が建てられた。「W3群」の建物からは瓦片が出土しており、8世紀中葉と目される賀古駅家の瓦葺き駅館の建設にも関わっていたとみられる。こうしてみると坂元遺跡は「駅子」の集落という面とともに、山陽道の建設基地的な性格も評価できるのではないかと考えられる。そして建設が落ち着いた8世紀後半になると集落の規模は縮小したのではないだろうか。

なお『II』では正方位と、正方位に対して東へ約44°傾く2種の方格地割を仮定し、層位的な観点からそれぞれの施行時期を8世紀前半、同後半と解釈して、建物群の年代を奈良時代前半と奈良時代後半に位置付けていた。しかしその年代観では今回の検討内容と齟齬が生じてしまっている。そこで奈良時代の土器がまとまって出土している井戸SE3701の資料で検証してみたい。

この一括資料に含まれる須恵器杯・壺などの形状からは、8世紀中頃に位置付けが可能と考えられる。そしてこのSE3701は、中心区画の東端を画する溝SD3703を切っていることから、少なくともW2群は8世紀中頃以前と考えるのが相当となる。この定点から敷衍すると、出土土器の検討から導き出した今回の年代観の蓋然性が高まると考えられる。

今回の小論では、遺構と出土遺物を再検討することにより、地割ありきではない評価が提示できたのではないかと考えられる。この作業が今後の駅家研究の一助になれば幸いである。

## 註

- (1) 兵庫県教育委員会2006『坂元遺跡I』(兵庫県文化財調査報告第308冊)  
兵庫県教育委員会2009『坂元遺跡II』(兵庫県文化財調査報告第366冊)  
兵庫県教育委員会2011『坂元遺跡III』(兵庫県文化財調査報告第404冊)  
兵庫県教育委員会2012『坂元遺跡IV』(兵庫県文化財調査報告第427冊)
- (2) 落ち込みSX03・05からは「I期」の土器が多量に出土している。
- (3) 兵庫県教育委員会2010『兵庫県古代官道関連遺跡調査報告書I』(兵庫県文化財調査報告第384冊)  
兵庫県教育委員会2013『兵庫県古代官道関連遺跡調査報告書II』(兵庫県文化財調査報告第455冊)  
龍野市教育委員会1992『布勢駅家』(龍野市文化財調査報告8)  
龍野市教育委員会1994『布勢駅家II』(龍野市文化財調査報告11)